

音楽鑑賞と表現活動における一考察

—アウトリーチ活動の実践記録をもとに—

坪井 眞里子

Thinking about Music Appreciation and Expression Activity Based on Practical Record of Outreach Activities

Mariko TSUBOI

はじめに

音楽科における鑑賞の授業は、子供たちが、多様な音楽に出会う場であり、音楽の本質に接することのできる大切な機会の1つである。新学習指導要領では、鑑賞授業における課題として、知覚・感受する内容の言語化に終始してしまう現状を鑑み、音楽を認知・感受する過程（プロセス）の重要性が問われている。音楽を味わう過程の大切さ、鑑賞の本来の在り方と表現活動との関連性・相互作用について考える必要性を強く感じる。鑑賞授業における体験を、いかに表現活動と関連付けるのか重要な課題の一つである。

本稿では、教育現場での音楽科授業実践をもとに、鑑賞と表現活動の関連性を考察していく。先に発表した「鑑賞授業におけるライブ性を考える 表現活動への繋がり—実践からの考察—」（名古屋女子大学紀要64号）に引き続き、鑑賞のライブ性、表現活動との関連性を考察するものである。アウトリーチ活動として平成30年2月に実施した愛媛県M市S小学校での鑑賞授業・表現活動の実践記録・アンケート調査をもとに分析を行う。鑑賞授業の中でライブ演奏と録音媒体での鑑賞の違いの検証と共に、表現活動の関連性について、新学習指導要領に基づき、授業展開における鑑賞授業の在り方を考察していくものである。

1 実践を行う上での考え方

(1) 授業における音楽鑑賞について

初等教育における音楽鑑賞授業は、児童の音楽に出会う機会として、特に重要である。音楽のジャンルも教科書において、クラシック音楽・世界の民族音楽・日本の音楽（民謡・箏曲・歌曲・雅楽）と幅広いものとなっている。多くのジャンルの知識を得ること、それらに親しむことで、子どもの視野・知識・感受する心を広げ、音楽を生涯にわたって愛好できる心情を養う大切な機会となる。

音楽鑑賞はそれ自体、大変個人的な行為である。そして主観的なものである。音楽鑑賞授業において、渡邊學而が言うところの「教えることができる側面」「教えられないが育てることができる側面」「教えることができない側面」¹⁾ この3点が存在する。指導者はそれを理解した上で、子ども達に興味・関心ができるような指導をする必要がある。教えられることとは、音楽を形作っている要素、構成、作曲者の生涯・時代背景といった客観的な事実である。客観的な事実から、興味関心を引き出し、音楽の本質や美しさに導くことが必要であると考えられる。

『音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。』²⁾ 目標の中にも「育む」「養う」「培う」と書かれている。指導者は、授業が「音楽を愛好する心情」を育てる一つ的手段であり、方法の一つであることを念頭におかなければならない。音楽鑑賞においては言葉による表記・評価にとらわれ、言語化に終始する実態も否めない。言語の表記では、共通事項（音楽を形作る要素）を発見する作業に追われる傾向がある。共通事項を把握することは、音楽の特徴との関わり、音楽的な効果と関わらせて理解するためのプロセスの一つなのである。

鑑賞授業では、音楽的な構造を探し出すことが目的ではなく、それが音楽の良さにいかに結びついているのかを把握することが重要である。音楽的構造の裏付けをもとに、音楽の良さを感受し、深い学びに繋がると考える。本実践では「教えられないが育てることができる側面」「教えることができない側面」に重点を置き研究を進める。

鑑賞における

教えることができる側面

音楽的事実 作曲家の生涯、作曲された背景、音楽史上の位置付け等

教えることができないが、育てることができる側面

音楽を聴く能力（リズム・強弱・曲想・構成等を聴き分ける力）愛好する心情

教えることができない側面

音楽を感受する感性 音楽美

（以上は、渡邊學而『音楽鑑賞の指導法』を基に独自にまとめたものである。）

（2）日本歌曲鑑賞と表現活動

小学校高学年において、鑑賞授業と表現活動を連続して行うことは、殆どの場合不可能である。感受・知覚した事を、できる限り持続した形で次の活動に生かしていくことは難しい。本研究では、日本歌曲の鑑賞と日本の歌の表現活動を関連付けた授業を行う為、連続した2時間の授業を設定していただいた。目的は、生演奏による鑑賞を表現活動へ繋げることにより、子ども達の興味関心を高めることにある。（日本の歌曲への興味関心と歌唱への興味関心の2点にある。）曲への理解とともに、歌唱の技能への関心を引き出すことを目標とする。

また、CD等のメディアでの鑑賞とライブ演奏について、どのように感受の違いがあるか検証する。鑑賞授業において、指導者はCD・DVDの選択や演奏形態について留意する必要がある。演奏というものは、どれ一つ同じ演奏がないからである。目的に即して教材を最適なものを選択しなければならない。そうしたメディアとライブ演奏による感受の違いをアンケートにより分析を行う。ライブ演奏は時間的、空間的要素を共有すること、この点において聴衆と演奏者における音楽的コミュニケーションも存在すると考える。小学校の研究に対するご理解のもと、鑑賞と表現活動を連動させた授業を行った。

2. 小学校での実施内容

（1）3つの研究テーマ

小学校第5学年、第6学年を対象に日本歌曲の鑑賞授業と歌曲、唱歌の表現活動の授業を実施した。3つの観点を研究テーマに授業展開を行う。

- ①日本歌曲の理解と親しみについて
- ②鑑賞授業におけるライブ性について。
- ③表現活動への関心・意欲について

以上の観点を知見する為に、鑑賞教室の直後アンケートを行った。表現活動においては、録音を行い、その歌唱の変化について実施校教諭からのご意見もいただき、検証を行う。時間的に限られている為、アンケート内容について質問を精査し最低限にとどめた。

(2) 事前授業について

音楽専科の教諭と打ち合わせの上、事前の授業において以下のことを実施した。本研究実践の一週前の授業で実施。

①メディア媒体での鑑賞

第5学年 山田 耕作作曲「待ちぼうけ」「赤とんぼ」「この道」の鑑賞を行う。

第6学年 滝廉 太郎作曲「花」「荒城の月」の鑑賞を行う。

- ②声の種類について、ソプラノ・アルト・テノール・バリトンについて授業内で声の高さや質についての説明を行う。歌う形態、独唱・重唱・合唱について説明を行う。各演奏について、CD等のメディア媒体を用いて演奏を鑑賞する。

(3) 鑑賞教室と表現活動の実施

「日本の歌曲鑑賞教室」

平成30年2月6〈火〉愛媛県M市S小学校。各学年音楽室で一斉授業。

第3校時 第5学年（28.26.28計82名 特別支援3名含む）

鑑賞「待ちぼうけ」日本語の言葉の感じをいかした歌曲を楽しみましょう

第4校時 第5学年（28.26.28計82名 特別支援3名含む）

歌唱表現「待ちぼうけ」を言葉や音楽の作りを生かして歌ってみよう

第5校時 第6学年（29.30.30計89名 特別支援2名含む）

鑑賞「花」言葉と旋律の美しさを感じとりながら、日本の歌曲を味わいましょう。

第6校時 第6学年（29.30.30計89名 特別支援2名含む）

歌唱表現 日本の唱歌のよさを感じ取り、歌ってみよう

(4) アンケートの実施

小学校には、本アンケートの実施と、アンケート結果を研究に使用することの承諾をいただいた。

実施日 平成30年2月6日 3・4・5・6校時の授業内（音楽室）

対象 第5学年79名、第6学年80名

実施のタイミング 鑑賞の授業最後の5分間

形式 7つの項目・無記名・4択又は5択 自由記述あり

(5) 授業進行

第5学年 「待ちぼうけ」日本語の言葉の感じをいかした歌曲を楽しみましょう

第3校時	活動及び内容	留意点
2分	演奏者の紹介 岡 眞里子（ソプラノ） 福富 彩子（ピアノ）愛媛大学 1. 日本の歌曲の始まりについて ・唱歌教育の始まりについて、簡単に説明をする。 ①唱歌の誕生と日本歌曲の誕生	自己紹介とメッセージ 発問 「今音楽の授業で歌っている歌はいつ頃できたのか？」 滝（洋楽を移入模倣から作品を残した。23歳と10か月で死去、1902ドイツへの留

5分	滝廉太郎1879と山田耕柞1886 ②ふたりが学んだ歌曲とは、ドイツ歌曲を聴いてみよう。 2. F. シューベルト「鱒」を鑑賞する。 (歌詞を見ながら聴く。) ・有節歌曲について、歌詞の内容によって曲想が違うことに気付く。	学ベルリンやライプツィヒ音楽院で作曲を学ぶ。) 山田(1910)ベルリン留学 王立芸術アカデミーで作曲を学ぶ。 有節歌曲について 同じ旋律の繰り返して歌詞の内容が変わる。
10分	3.山田耕柞の作品鑑賞 ①「赤とんぼ」 ②「待ちぼうけ」 北原白秋の詩について 生い立ちと詩から感じられる世界について知る。 ③「この道」 ④「からたちの花」 ⑤「あわて床屋」	「歌う時にどういうことが必要になるか?」 ・鑑賞の間は聴いて、次の時間で発表することを伝える。 ・北原白秋の生い立ちが反映されている内容と山田耕柞との作品について話を交える。 ・ピアノの音色、歌とのアンサンブルについて話をする。
25分	日本古謡 ⑥「さくらさくら」 唱歌 ⑦「冬げしき」	共通歌唱教材の「冬景色」を取り上げ、情景について共有する。
30分	「質問コーナー」	
40分	アンケート記入。	
45分	アンケート終了。	

第5学年 表現活動「待ちぼうけ」を言葉や音楽の作りを生かして歌ってみよう

第4校時	活動及び内容	留意点
8分	1 歌う準備をする。 ① 気持ちのいいのびをする。 ② 腹筋を動かす。 ③ 共鳴ハミングから母音へ。 ④ 音階練習 2 「待ちぼうけ」の詩について知る。 中国の「守株待兔」という説話。 前時の鑑賞—同じ旋律フレーズで歌詞の内容が変わる時、どういうことが必要になるか発表する。	児童に模範を示しながら、説明。 準備体操。腹筋を動かしてみる ハミングをして響きを見つけるよう促す。 1度、2度、3度の発声練習。 発問 有節歌曲について 同じ旋律の繰り返して歌詞の内容が変わる。歌う時にどういうことが必要になるか?
10分	○それぞれの歌詞に合わせて、歌い方の工夫をする。 「待ちぼうけ」 歌詞の音読（抑揚をつけて） 1 番の歌い方の工夫と歌唱 2 番の歌い方の工夫と歌唱 3 番の歌い方の工夫と歌唱 4 番の歌い方の工夫と歌唱 5 番の歌い方の工夫と歌唱 それぞれの情景、気持ちのちがいと効果的な歌い方を考える。	Powerpointで歌詞の色付け リズムと言葉、情景を話しながら導き出す。 1 番の情景について 2 番の気持ちの変化 3 番歌詞の中でのテンポ感 4 番どんな歌い方が一番ふさわしいのか。 5 番どんな終わり方がよいか。
25分	3 工夫した点について確認する。	

30分 40分 45分	4 「待ちぼうけ」を続けて歌う。 質問コーナー	全体を歌って感じたことは、何か。
-------------------	----------------------------	------------------

第6学年 「花」言葉と旋律の美しさを感じとりながら、日本の歌曲を味わいましょう。

第5校時	活動及び内容	留意点
2分	演奏者の紹介 岡 真里子（ソプラノ） 山崎 悦子（ピアノ） 1. 日本の歌曲の始まりについて ・唱歌教育の始まりについて、簡単に説明をする。	自己紹介とメッセージ 発問 「今音楽の授業で歌っている歌はいつ頃できたのか？」 滝（洋楽を移入模倣から作品を残した。23歳と10か月で死去。1902ドイツへの留学ベルリンやライプツィヒ音楽院で作曲を学ぶ。）
5分	①唱歌の誕生と日本歌曲の誕生 滝廉太郎1879と山田耕作1886	
10分	②ふたりが学んだ歌曲とは、ドイツ歌曲を聴いてみよう F. シューベルト「鱒」鑑賞	
	2. 滝廉太郎の作品 組曲「四季」について。構成と内容について知る。 ①「花」 ②「納涼」 モデルとなった城について、歌詞からの視点と曲からの視点でイメージをする。 ③「秋の月」 ④「荒城の月」 3. 唱歌を聴く 高野辰之作詞 岡野貞一作曲 ①「おぼろ月夜」 ②「ふるさと」	組曲「四季」明治33年大きな希望と先駆者としての自覚をもって作曲編纂した。 重唱曲・合唱曲・独唱曲で構成される。 2つの月の歌曲について説明。 土井晩翠の歌詞について説明。
40分	アンケート記入。	共通点 有節歌曲にについて 同じ旋律の繰り返して歌詞の内容が変わる。
45分	アンケート終了。	次の時間で発表することを伝える。

第6学年 表現活動「ふるさと」を歌ってみよう

第6校時	活動及び内容	留意点
	1 歌う準備をする ① 気持ちのいいのびをする。 ② 腹筋を動かす。 ③ 共鳴ハミングから母音へ ④ 音階練習 1度、2度、3度の音階で発声をする。	児童に模範を示しながら説明。 発問 有節歌曲にについて 同じ旋律の繰り返して歌詞の内容が変わる。歌う時にどういふことが必要になるか？ ヒントをまじえながら。工夫を引き出す。どのような気持ちであるのか。
8分	2 「ふるさと」の詩についてイメージをつくる。 どういう風景かー日本の原風景 どんな心情であるかー歌詞からよみとく ○それぞれの歌詞から、まず全体的な強弱を考える。	1 番「ふるさと」はどういう意味があるか？ 2 番「雨に風につけても」
10分	○それぞれの歌詞とフレーズから強弱を考える。 ○歌い方の工夫はどんなことができるか考える。	

	○音の高さから音楽の流れをみつける。 歌詞の音読 1 番の歌い方の工夫と歌唱 2 番の歌い方の工夫と歌唱 3 番の歌い方の工夫と歌唱 それぞれの情景、気持ちのちがいと効果的な歌い方を考える。	3 番「こころざしを果たして いつの日にか、帰らん」 最後にどのような心持ちを表現するか。 表現するためにどのような技能が必要になるか？
25分	3 「ふるさと」を続けて歌う。	発声面からのアドバイス。
30分	4 「広い世界へ」	リズムの特徴と曲想から歌い方を指導する。
40分	質問コーナー	
45分		

3. アンケート結果と考察

授業出席者第5学年82名（特別支援3名含む）第6学年82名（特別支援2名含む）。特別支援の児童には行われていない。よって第5学年79名解答、第6学年80名の解答となった。回収率は100%であった。また学年ごとに全回答ランダムにナンバリングを行った。

（1）アンケート内容

アンケートの内容について、先に挙げた3つの研究テーマを反映させるため、以下の内容とした。

①日本歌曲の理解と親しみについて。質問1・2

日本の歌曲の美しさや、日本の詩の世界を感受し、関心、親しみが生まれるか

②鑑賞授業におけるライブ性について。質問3・4

演奏媒体の違いによる感受の違い

③表現活動への関心・意欲について。質問5・6

鑑賞と表現活動を連続して行うことで、表現活動の意欲・関心の変化がみられるか。

鑑賞（かんしょう）に関するアンケート

今日の演奏（えんそう）の印象（いんしょう）をおしえてください。あてはまるものに○をつけてください

1 日本の歌曲（かきょく）をどう思いましたか。

①きらい ②あまり好きでない ③好き ④とても好き ⑤大変好き

2 今日の演奏（えんそう）を聞いて日本の歌曲に興味（きょうみ）がもてましたか。

①興味（きょうみ）がない ②少し興味がもてた ③興味をもった

④大変興味をもった ⑤もっと聞きたい

3 生の演奏（えんそう）とCDなどの演奏で違い（ちがい）は感じましたか。

①わからない ②少しちがう ③ちがう ④ずいぶんちがう ⑤全然（ぜんぜん）ちがう

4 生の演奏とCDでは何がちがいますか。2つ選んで○をつけてください。

①声やピアノの音色（ねいろ） ②曲想（曲の感じ） ③言葉がわかりやすい

④演奏から発見や驚き（おどろき）など感じる ⑤その他（ ）

5 日本の歌を歌ってみたいと思いましたか。

①歌いたくない ②少し歌いたい ③歌ってみたい ④いろんな曲を歌ってみたい

6 日本の歌に限らず、いろんな歌を歌いたいですか。

①歌いたくない ②少し歌いたい ③歌ってみたい ④いろんな曲をもっと歌いたい

7 今日発見したことや心に感じたことを自由に書いてください。

(2) アンケート結果 平成30年2月6日実施（愛媛県M市S小学校鑑賞教室）

質問 1

表 1 日本歌曲をどう思いましたか（日本歌曲への理解と親しみ）

日本歌曲をどう思いましたか	第5学年			第6学年	
	%	n		%	n
1 きらい	—	—	ns	1.27%	1
2 あまり好きでない	7.50%	6	ns	11.39%	9
3 好き	66.25%	53	ns	55.70%	44
4 とても好き	21.25%	17	ns	22.78%	18
5 大変好き	5.00%	4	*	8.86%	7
		80			79

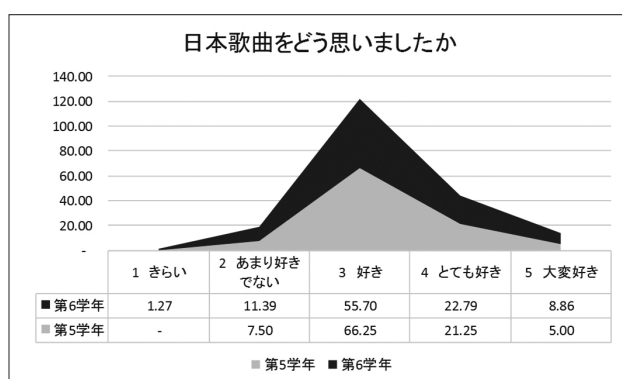


図 1 日本歌曲をどう思いましたか

5年生では「きらい」と回答した児童はいなかった。6年生では1名（No.56）（1.27%）の児童が該当した。「あまり好きでない」と回答した児童は、5年生6名、6年生9名と近い数値であった。「好き・とても好き・大変好き」と回答した児童は、5年生で全体の92.5%。6年生は87.34%であった。図1からも「好き」と答えた児童を最も多く、比率から判断して、概ねの児童が日本歌曲を受け入れることができたと理解する。

質問 2

表 2 日本歌曲への興味（日本歌曲への理解と親しみ）

日本歌曲への興味	第5学年			第6学年	
	%	n		%	n
1 興味がない	2.50%	2	ns	2.53%	2
2 すこし興味をもてた	36.25%	29	ns	37.97%	30
3 興味をもった	36.25%	29	ns	34.18%	27
4 大変興味をもった	6.25%	5	ns	10.13%	8
5 もっと聴きたい	18.75%	15	ns	15.19%	12
		80			79

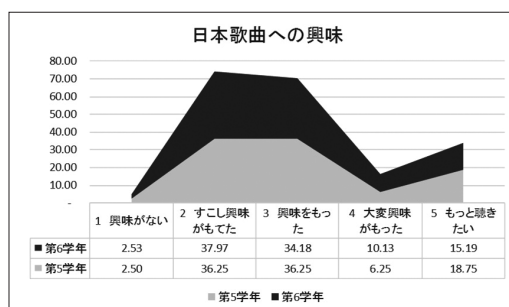


図2 日本歌曲への興味

「興味がない」と回答した児童は5年生で2名（2.5%）6年生でも2名（2.53%）で5年生6年生とも同じ割合であった。興味を持てたと解釈する範囲を「少し興味を持てた」以降とすると、5年生が97.5%、6年生が97.4%とほぼ100%に近い。5年生、6年生共に同じような比率が図2からも検知できた。

質問3

表3 生の演奏とCDの演奏のちがい（鑑賞のライブ性について）

生の演奏とCDの演奏のちがい	第5学年			第6学年	
	%	n		%	n
1 かわらない	1.25%	1	*	3.80%	3
2 少しちがう	15%	12	ns	16.46%	13
3 ちがう	11.25%	9	*	18.99%	15
4 ずいぶんちがう	21.25%	17	ns	20.25%	16
5 全然ちがう	51.25%	41	ns	40.51%	32
		80			79

鑑賞媒体の違いについての質問では、ほぼ全員に近い児童が「ちがう」と答えた。違いを検知した比率は5年生で98.75%、6年生で96.2%となる。5の「全然違う」と答えた児童が5年生では41名で約半数。6年生でも40.51%で半数近くが違いの大きさを認識している。

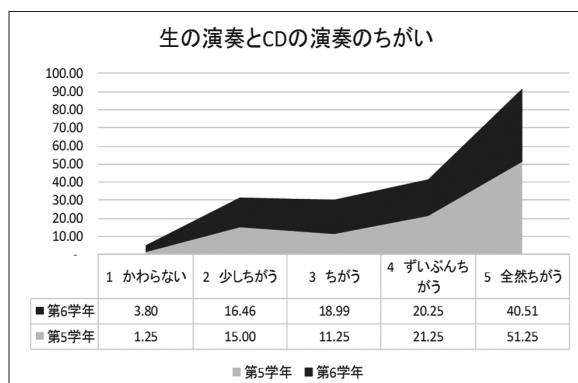


図3 生の演奏とCDのちがい

図3のグラフからもわかるように、5年生と6年生はほぼ同じ比率である。「全然違う」と認識している児童が若干5年生で多いことも認識できる。このグラフからも録音媒体と生の演奏は児童にとっても大きな違いがあることが知見できる。

質問4

生の演奏とCDの演奏の違いを認識した児童に、何に違いを感じたかの質問を行った。内容として、音色、曲想、内容、感受した印象、その他で分類した。ここでは、声の音色とピアノの音色は、同じ音色としてまとめた。言葉に関して、メディアでの音質、発語の聞こえ方の違いもある為、項目に加えた。その他では、自由に感じた違いを記述する項目を設けた。選択を2つとしており、この結果は各々の学年数を100として、選択した比率を算出した。

表4 生の演奏とCDのちがい

生の演奏とCDのちがい	第5学年			第6学年	
	%	n		%	n
1 声やピアノの音色	41.83	64	ns	50.00	72
2 曲想(曲の感じ)	30.71	47	ns	31.25	45
3 言葉がわかりやすい	9.15	14	ns	6.25	9
4 演奏からの発見や感じる事	13.07	20	ns	8.33	12
5 その他	5.23	8	*	4.13	6
		153			144

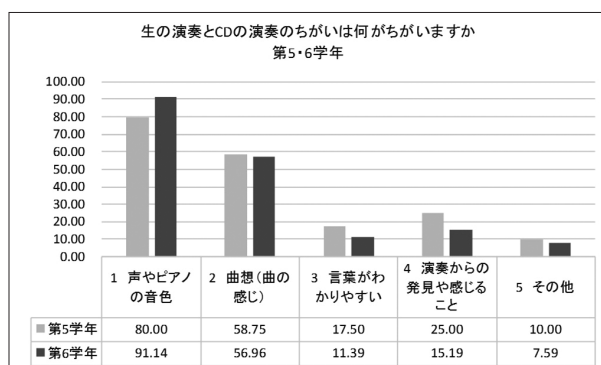


図4 生の演奏とCDでは何がちがいますか。

図4から声やピアノの音色に関する違いが最も多く、それぞれの学年の80%、91.1%の児童が違いを感じている。曲想（曲の感じ）に関しても、約60%の児童が違いを感じていることが知見できる。

言葉に関する違いに関して録音媒体と生の演奏で17.5%・11.39%と大きな差異はみられない。

演奏から感受する点に関しては、5学年で25%、6学年では15.19%の児童が違いを感じている。その他

に関して記述のあったものは第5学年で（歌い方、声の高さ、ひびき方、表情、表現）第6学年（声のひびき、表情、迫力、声の大きさ）であった。主な感じ方の違いとして、ひびきと表情が共通している。

質問5

表5 日本の歌を歌ってみたいと思いましたか（関心・意欲）

日本の歌をうたってみたい	第5学年			第6学年	
	%	n		%	n
1 歌いたくない	5.00	4	ns	7.59	6
2 少し歌いたい	45.00	36	*	53.16	42
3 歌ってみたい	37.50	30	**	18.99	15
4 いろんな曲を歌いたい	12.50	10	*	20.25	16
		80			79

「日本の歌を歌いたくない」という児童が5年生では4名（5%）6年生では6名（7.59%）を除いて、5年生95%、6年生92.41%の児童が歌いたいと回答している。発展的な「いろんな曲を歌いたい」に関しては、6年生の方が比率的に上回っている。

質問6

表6 他国の曲も歌ってみたい

他国の曲も歌ってみたい	第5学年			第6学年	
	%	n		%	n
1 歌いたくない	5.00	4	ns	6.33	5
2 少し歌いたい	31.25	25	ns	36.71	29
3 歌ってみたい	48.75	39	*	35.44	28
4 いろんな曲を歌いたい	15.00	12	*	21.52	17
		80			79

「歌いたい」に属する人数は、5年生76名（95%）6年生74名（93.67%）であった。「歌ってみたい」とする比率が、日本の歌よりも、5年生・6年生ともに高いことがわかる。外国曲への興味の方が日本の歌曲を上回ることが、顕著に知見される。

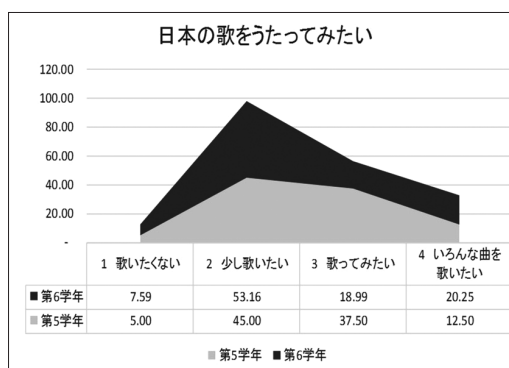


図5 日本の歌をうたってみたい

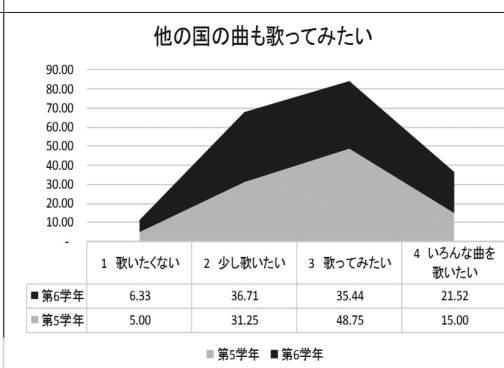


図6 他国の曲も歌ってみたい

(3) アンケートからの考察

まず今回のアンケートの目的であった3つの観点からの考察を行う。

①日本歌曲の理解と親しみについて：質問1・2を概観して、概ね親しみの気持ちは持てたと知見する。「好き・とても好き・大変好き」と回答した児童は、5年生で全体の92.5%。6年生は87.34%であった。また興味が持てましたかという質問に関して、「少し興味が持てた」以降を合算すると、5年生が97.5%、6年生が97.4である。日本歌曲は児童にとって、どちらかという退屈なイメージがあり、現在の大学生においてもあまり興味のあるジャンルではない。音楽の美しい世界はわかるが、関心がなかなか生まれない現状を大学の授業においても垣間見ることがある。S小学校の教諭に児童観として伺ったが、日本の歌は、身近にあるだけに西洋の曲に比べて、積極的な興味がわからない現状もあるとのことであった。そうした中で行ったライブ演奏は本アンケートより、日本歌曲の理解と興味を前進させたことで意義があったと理解できる。

質問1で「日本の歌曲がきらい」と回答したNo.56の6年生の児童は、質問2「興味が無い」、質問3「生演奏とCDは違いがある」、質問4（音色・曲想）質問5「少し歌いたい」、質問6「少し歌いたい」と答えている。また自由記述に「CDとは全く違っていると思いました」と記述

している。好きではないが、多少の興味を感じたことが知見できる。

また、質問1で「あまり好きでない」と答えた9名No.24/31/36/39/61/67/68/76/77の児童に関して、質問2では「興味がもてた」が3名「少し興味が持てた」が6名回答している。退屈な世界に思える日本の歌曲に少し心の動きが読み取れる。

②鑑賞授業におけるライブ性について演奏媒体の違いを感じるか、またどのように違いを感じとっているかについて：質問3では、違いを認識した児童数は5年生では、98.5%、6年生では96.2%でCDの演奏とライブ演奏での違いの認識は大きいと知見できる。

その内容は質問4において「声やピアノの音色」が、5年生80%、6年生では91.17%と最も違いを感じる項目となっている。そして次の優位は「曲想」である。両学年60%近くの児童が違いを認識している。「曲想」はその楽曲の解釈でもあり、音楽的な構成もそれに含まれる。同じ曲を聴いた時の印象の違いを、言語化するのには難しいが、曲想によって楽曲の印象も随分変化する。その違いを児童は感受したと判断する。その他の記述には「響き」「表情」「迫力」という言葉があり、同じ空間を通した効果があったことが知見できる。

③表現活動への関心・意欲について：鑑賞と表現活動を連続して行うことから、表現活動の意欲・関心の変化について、第5学年95%、第6学年93.67%の児童が「歌いたい」という方向性を示している。また他の国の曲を歌うということへの関心が如実に感じられたのが、質問6である。日本の歌よりも、世界の歌への関心が高いことが、図5、図6のグラフの形からも知見できる。日本の歌に関しては、「少し歌いたい」に頂点があるが、日本の歌以外の方は「歌ってみたい」の方向に頂点がある。このことから、児童は日本の歌というよりも、歌うこと全般への関心が、高まっていることが検証できる。歌唱の技能への関心の高まりを授業の中で実感することができた。

授業内での質問コーナーでは、歌唱技術に関することが中心であった。1名のみ「山田耕筈の作品数はどのくらいありますか」という質問があった。時間的に十分な時間がとれず、全体で5名ほどの質問があった。5年生、6年生共通してあった質問は「どうすれば、歌が上手になりますか?」「高い音が出にくいのですが、どうすればいいですか?」という質問があった。ここからも歌唱への関心は、歌う技能にあることが把握できる。

(4) 自由記述について

自由記述では、児童の率直な印象が多く感じられる。いくつかの自由記述を以下に記す。
 第5学年 No.2「とても高い声を出して歌っていたので、とてもすごいなと思いました。また歌声がとてもきれいだったので、びっくりしました。日本の歌曲に少し興味をもちました。私も先生のようにきれいな歌声がだせるようになりたいです。」/No.11「私はこのようにきくのは初めてでした。中略～歌とピアノが曲に合わせてスピードや強さをかえていて上手でした。」/No.16「ピアノをととてもきれいにひいていて、歌をうたってくれた人は、とても口がいていて響きがありとりはだがたちました。CDと全然ちがってよかったです。日本の曲にはあまりきょうみがなかったけどきょうみをもちました。」/No.29「シューベルト作曲の鱒の漁師が盗人になっているところ、また歌の強弱がとてもわかりやすくて、3番の「だまされた魚をじっとみていた」というところはたすけたくてもたすけられなかったというふうに感じました。歌のかしものはっきり聞こえてとてつもなく勉強になりました。」/No.35「歌っているときの表情がとても大きくて、きいているがわに、すごく、良い印象をあたえてくれました。表現の仕方も、すごく勉強になりました。」/No.44「先生のうた声のたかさやこのこえのたいきゅう力がすごいと思いました。いろいろな歌のとくちょうをしりつくしていてすごいと思いまし

た。ピアノのえんそうもすごかったです。どくしょうなのにごういとおもいました。」/No.56「ピアノの方のひきかたがとて上手でびっくりしました。歌で高音のところがかれいですがくはくりよくがありました。また聞きたいです。」/No.79「声がすごくきれいでした。なめらかにうたっていてごういとおもいました。ピアノの人も感情をだしながらひいていて気持ちがあわってきました。」

第6学年 No.4.「CDより生できいた方が言葉の意味とかつたわりやすいし音の高い所低い所がわかりやすく全体的にわかりやすかった/No.19今まで聴いたことのない歌い方や声。とてもきれい。高い。」/No.25「私は最初、日本の歌はすごく難しくて、あまり興味がないなと思っていたけれど、お話や、演奏をきいて、日本の歌はすごくききやすくて、興味をもちました。滝廉太郎の曲も、いいなと思って、興味をもてたのでよかったです。」No.37「高音がかれいでとても響く声だと思った。どうやったら出せるのだろうかが不思議だ。」/No.45「日本の曲はアーティストの曲や外国の曲とは全然違い、日本の和の感じ特有の独特な良さがあり日本の曲も歌ってみたいと思いました。」/No.53「生の演奏は初めてきいたので、とてもいい経験になりました。CDではわからない、ひびきやはく力を感じました。」/No.69「今日、生の歌を聞いてみて表顔、や歌声にはくりよくがあって自分もあんな声でうたってみたいと思いました。声がとても高くてきれいでした。」/No.71「今日生で聞いておなかから声をだしているところなどがよくわかり、ソプラノの方の声を聞いてCDで聞くよりとてもきれいでした。1つ1つの曲が生きているみたいでとても感動しました。」

上に示したのは、一部であるが、自由記述から児童の率直な感想を知ることができる。アンケートの始めの質問「日本歌曲をどう思いますか」で②「あまり好きでない」と答えた児童の自由記述についても、全体を通して肯定的な感想が記述されている。以下に一部を記す。

第5学年No.19「声が高い、ピアノ演奏も歌い方もきれいでよかった。また聞きたい。」No.20「CDやDVDではソプラノ・メゾソプラノ・アルトなどの高さや低さがわかりにくかったけれど、生演奏で生で歌声をきくとすごくわかりやすくてびっくりしました」No.40「待ちぼうけは歌い手によって、歌い方がいろいろ変わることにおどろきました」

第6学年No.24「もっといろんな歌曲をきいてみたいと思います。生できいたらCDとはちがってはく力などがあってもっとききたいと思いました。」No.31「CDより生で、きくほうが、声や曲想がちがうと思いました。日本の歌曲は、まったくしらないのばっかだけど、だいたいじょうけいがわかったのとてよかったですと思いました。」以上は一部である。

自由記述からも、日本歌曲に好感をもった児童、好感をもっていない児童にも、この鑑賞授業が出会いにおいて有効であったことが読み取れる。児童は様々な聴き方をしており、そこには各々の発見と出会いがある。それは、音色・響き・曲想・音楽・日本歌曲の良さ表現活動の多様性でもあり、感受した事柄を自分自身の学びの一部として、自己との比較も行っている。通常の音楽の授業であると同時に、非日常の体験であった。日本歌曲や歌うこと、または声楽というものに対する先入観も含めて生演奏というのは、有効な体験となったことが検知できる。

4. 考察

鑑賞と表現活動の関連性について、小学校での実践を通して検証を試みた。今回の実践から児童の心に何らかの変化があったことが検知できた。それは、日本の歌という認識や歌唱・歌うことの価値観の変化であると思われる。日本歌曲は身近にあるだけに、退屈なものというイメージが否めない。そうしたこれまでの認識や経験で形作られたイメージを変化させ、その世

界を許容・理解するという上において、生の演奏を聴くことは有効であったことがわかる。日本歌曲の理解と親しみ・表現活動への関心・意欲は、児童の世界観を広げる一つのきっかけとなったと考える。音楽を鑑賞することによって、聴く主体が、心理的な変化、変容を認める可能性があるということである。声楽的な歌唱についても発声や声の響きを同じ空間で体験することで、歌唱表現活動への興味と積極的な意欲を授業の中でも把握することができた。授業の録音においては、生き生きと声を出して歌う児童の歌唱が録音されている。ここで重要なことは、個々が自己を通して、歌唱・表現活動を捉えたことにある。アンケートの自由記述にもあった「自分は…であるが」「高い音がでないけど…どうすれば」という疑問において、自己との比較が行われている点が重要である。連続して行う授業では、気持ちや緊張感の持続性が高くなる。そうした効果として、発声の為の体操にも積極的な取り組みが見られた。非日常である指導という点においても、主体的な姿勢を導きだせたと推測できる。生演奏による鑑賞授業は日本歌曲の良さを感受し、歌唱の表現活動への興味関心を高めることに関して効果があったと考える。



図7 発声練習(第6学年)

また鑑賞授業におけるライブ性について、CDを用いた録音媒体との比較において、殆どの児童が違いを認識している。その内容については音色、声の質等、音そのものの印象についての回答が最も多く、次に曲想、そして、演奏から感受する内容となる。昨年の論文「鑑賞授業におけるライブ性を考える 表現活動への繋がり―実践からの考察―」から検知した結果と同様に、ピアノや歌の音色や声の質について感受する児童が多いという共通点が検知される。この点において着目すべきは、児童の音楽の捉え方にあり、まず音そのもの(音色、音の響き)の印象を強く受けるということがわかる。また視覚的に演奏者の表情が直接的に見えることから、児童は大きな影響を受けることが知見できる。音楽を身近に直接的に感受することにより、興味・関心の高まりも有効であった。これらは、時間と空間を共有するという生演奏の根幹にも関わる。そこには音楽を介した、演奏者と聴衆のコミュニケーションが存在する。そうした意味においても、何らかの心理的効果を生んでいることをアンケートからも認識することができた。

音楽教育において絶対的な美はないと考えなければならない。また、指導者もそれを十分理解、許容した上において鑑賞授業を進めるべきである。鑑賞授業というのは、音楽に出会う「場」「時間」「空間」である。同じ空間で同じ音楽を聴くこと、しかしそれは自分という主観を通して心に働きかけるのである。そして様々な意見を出し合うことで、相対的な価値観を共有することとなる。そうした音楽を聴取する主観的な感覚に働きかける上において、ライブ性は必要であると考え。これらは渡邊が言うところの「教えられないもの」に属する。美しいと感じる「美的感覚や美意識」「音楽を愛好する心情」は育てるものであり、直接教えることのできないものである。音や音楽を美しいと感じる感覚は、児童の聴く能力や心理的な発達にもかかわることである。それらを育む上においても、深い学びを生む鑑賞と表現活動の連続性・相互作用は、今後さらに授業の上で考慮されなければならないと考える。

謝辞

本研究にあたりご協力いただいた、愛媛県M市S小学校、同校教諭 白方恵里子氏、愛媛大

学教育学部准教授 福富彩子氏、ピアノ講師 山崎悦子氏に深く感謝申し上げます。

注・引用文献

- 1) 渡邊學而『音楽鑑賞の指導法』財団法人音楽鑑賞教育振興会（2008）43
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領 第6節 音楽』平成29年3月

参考文献

- 坪井真里子「小学校－歌唱共通教材における指導法」名古屋女子大学紀要63号（2017）
坪井真里子「鑑賞授業におけるライブ性を考える」名古屋女子大学紀要64号（2018）
山本文成『戦後音楽館教育の流れ』財団法人音楽鑑賞教育振興会（2010）
渡邊學而『音楽鑑賞の指導法』財団法人音楽鑑賞教育振興会（2008）
山下薫子編「小学校新学習指導要領 ポイント総整理 音楽」東洋館出版社（2017）
野村良雄『改訂 音楽美学』音楽之友社（昭和50年）
一柳慧『音を聴く 音楽の明日を考える』岩波書店（1984）
文部科学省『学習指導要領解説 音楽編』平成29年6月